【日本の大学】第６４回：法政大学――自由と進取の精神で課題解決に貢献

法政大学は、明治時代の初期に東京・神田駿河台に設立されたフランス法系の法律学校を前身とし、現在は 15 学部・大学院 17 研究科を擁する私立の総合大学である。法政大学憲章では「人々の権利を重んじ、多様性を認め合う『自由な学風』と、公正な社会の実現を目指す『進取の気象』を建学以来の精神としており、その精神を受け継いで地球社会の課題解決に貢献することを使命とする」と謳っている。

市ケ谷キャンパスのシンボル、ボアソナード・タワー

３人の若手法律家が創立

1880（明治 13）年に、フランス法学を学ぶいずれも 20 歳代の金丸鉄、伊藤修、薩埵（さった）正邦ら無名の法律家たちによって「東京法学社」は設立された。この時期は、近代国家にふさわしい制度作りや自由民権運動の全国的な高揚期に当たっており、近代的な法制システムや権利義務などに関する学校の設立が強く求められていた。このため、すでに紹介した明治大学、中央大学もほぼ同時期に法律学校として設立されている。

以下、法政大学のホームページなどから、大学の歴史と現状をみていこう。

初期の法学教育には、フランス人の司法省法学校教師（パリ大学教授）ボアソナード博士が大きな役割を果たした。博士は、日本政府が法典編纂のために招聘していた専門家であり、

設立者の一人、薩埵が法律の直接指導を受けていた縁があった。博士は、東京法学社から1881 年に東京法学校が分離独立したあと教頭に就任し、12 年間にわたって無報酬で法学校の基礎固めに精魂を傾けてくれたという。博士の熱意から始まった法政大学がその後もフランス自然法的な近代法の基本理念を持ち続け、「自由と進歩」の学風を作り上げたと言えるだろう。

1889 年には東京法学校と東京仏学校（日仏教会の前身の仏学会により 86 年に設立）が合併して、和仏法律学校と改称した。また、1890 年からは、講義録による法律学の通信教育である「校外生」制度を開設。これが大きな反響を呼んで、第 3 期生を募集する 1893 年頃には学生数が 8 千人を超えるほどになったという。校外生制度はその後も続けられ、第 2 次大戦後の 1947 年には、日本で最初の大学通信教育課程が、通信教育部として開設されている。

法科大学院棟

専門学校令の公布に伴って、法政大学と校名が改まったのは 1903 年のことである。予科、大学部、専門部、高等研究科が設置された。1904 年には清国留学生法政速成科が開設された。清国からの留学生は法学や政治学を学び、卒業生たちは帰国後、新しい中国建設に尽力した。

1920 年には、大学令（旧制）による認可を受けて、総合大学として新たにスタートし、法学部（法律学科・政治学科）、経済学部（経済学科・商業学科）、大学予科及び各学部の研究科が設けられている。1921 年には東京・麹町区富士見町（現在の市ヶ谷キャンパス）に校舎を新築し移転。22 年には法学部を法文学部に改組して、文学科と哲学科が加わった。

第 2 次大戦中の 1943 年以降、学徒出陣によって、陸海軍併せて約 10 万人の学徒兵が戦地に赴くことになった。出陣した法大生は約 3500 人にのぼり、このうち約 700 人の戦没が確認されている。また、44 年には空襲によって富士見地区校舎の大半を焼失した。

富士見坂校舎

法・文・経３学部でスタート

戦後の 1947 年には、法文学部を法学部と文学部に改編し、経済学部と合わせて 3 学部体制となった。学校教育法により新制の法政大学が発足したのは 1949 年である。

法学部は日本最初の私立の法学校の伝統を受け継ぐ学部であり、現在は、法律学科、政治学科、国際政治学科の３学科で構成されている。文学部は、1922 年に法学部が法文学部に改組され、文学科と哲学科が新設されてから創立 100 年の歴史がある。現在は、哲学科、日本文学科、英文学科、史学科、地理学科、心理学科の 6 学科があり、卒業論文の作成が義務付けられている。

経済学部も創立 100 年を超える歴史があり、「経済現象や経済問題を体系的に解明し、社会に対して有益な政策提言ができる人材を育成すること」を掲げている。経済学科、国際経済学科、現代ビジネス学科の 3 学科体制となっている。

大内兵衛氏（著名なマルクス主義経済学者）が総長に就任したのは 1950 年、この年に工学部が置かれている。翌 51 年に法政大学は学校法人となった。大内総長は、「独立自由な人格を作ること」、「空理を語らず、日本人の社会生活の向上発展のために、たとえ一石一木でも必ず加えるような有用な人物を作ること」という指針を、学生らに与えている。

1952 年には社会学部、59 年には経営学部が設置されている。社会学部は社会課題の発見とその解決に向けて、さまざまな理論、手法、方法を効果的に身につけるカリキュラムを構築し、提供している。社会学部は、私立大学では日本で初めて設立された学部で、2018 年度からは社会政策科学科、社会学科、メディア社会学科に分かれている。経営学部も私立大学としては 2 番目に古い学部であり、現在は経営学科、経営戦略学科、市場経営学科に分かれている。

多摩キャンパス 4 号館（社会学部 A 棟）・5 号館（社会学部 B 棟）

1960 年代以降、他大学と同様、大学の在り方などをめぐって学生運動が高まり、大学の存在理由を問われることとなった。その中で、全学移転を視野に入れて、多摩キャンパスの開発が行われ、経済学部と社会学部の 2 学部が 1984 年以降順次、移転した。

多摩キャンパス 8 号館（経済学部 A 棟）・9 号館（経済学部 B 棟）・10 号館（経済学部 C 棟）

多摩移転で規模を拡大

多摩移転によって、大学は校地、学部数、学生数、教員数の拡大が可能となった。

1999 年には国際文化学部、人間環境学部が新設され、2000 年には現代福祉学部、情報科学部を設置。次いで 2003 年にはキャリアデザイン学部のほか、以降、既存学部でも新たな学科の設置が相次いだ。大学院でも新たな研究科が次々に設けられている。

1950 年に設置された工学部は時代の要請を受けて、学科を改組し 8 学科編成（1993 年）としたあとも、システムデザイン学科（2004 年）、生命機能学科（2006 年）が加わり 10 学科編成となった。2007 年には、10 学科のうち、建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科の 3 学科を改組転換してデザイン工学部を新設している。翌 08 年には理工学部と生命科学部を誕生させている。

理工学部は現在、機械工学科（機械工学専修、航空操縦学専修）、電気電子工学科、応用情報工学科、経営システム工学科、創成科学科からなっており、「講義形式中心から参加型の授業へ」を謳い、授業で与えられた問題に対し、解法や答えを教師から学ぶのではなく、問題解決の道筋を自分自身で考え、仲間で討論しながら合理的な解を見出していく。

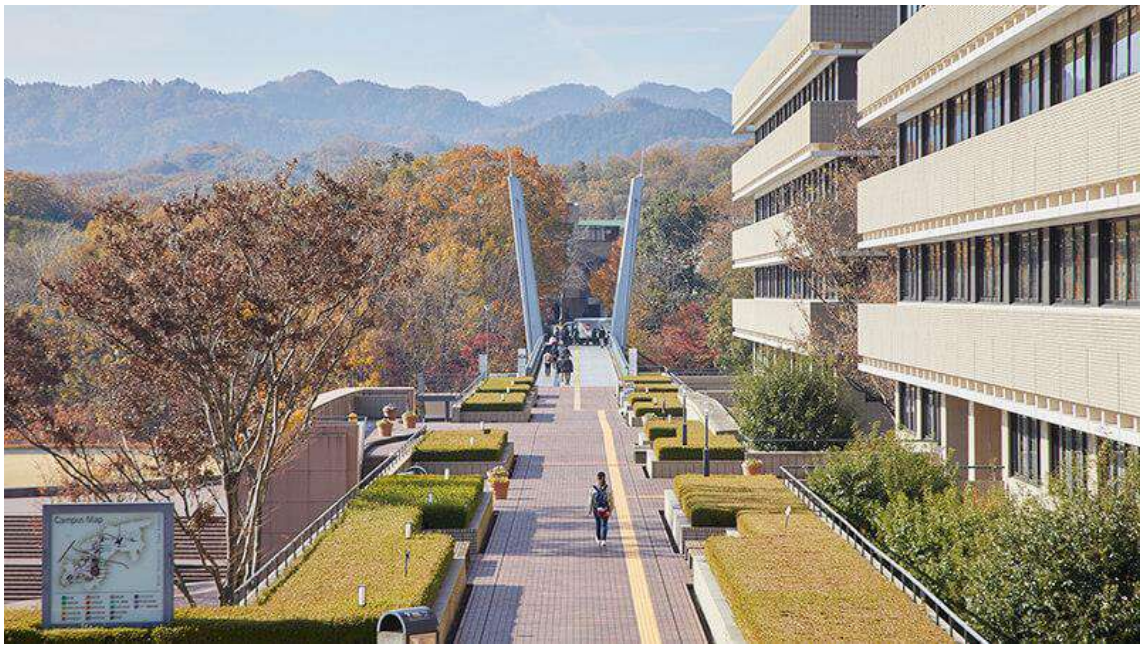
近年、目覚ましい進歩を遂げている生命科学の分野から発信された知見や技術は、医療、

農学などさまざまな産業分野に影響を及ぼし始めている。また地球環境がきわめて深刻な変化を起こしている現在、人類と環境、資源との共生との観点から生命科学の応用分野の発展が求められている。こうした社会的背景を踏まえて 2008 年に開設されたのが、生命科学部である。生命機能学科、環境応用化学科、応用植物科学科の 3 学科で構成されている。

1999 年に開設された国際文化学部は学部の目標として、言語、ICT、映像、身体などを駆使して文化の間で生じる現象を理解し、それをもとに表現・発信できる「国際社会人」を育てることを目指す。四つのコースがあり、情報文化、表象文化、言語文化、国際社会の各コースの中で基幹科目と専攻科目を履修しながら、専門性を高めていく。

人間環境学部は「人間と環境の共存」と「人間と人間の共生」を両立させた「持続可能な社会」の構築を理念とする文系の総合政策学部である。フィールド・スタディ（現地学習）や環境に関連する外部講師を招いての「人間環境セミナー」などに力を入れている。「サステイナブル経済・経営コース」「人間文化コース」など 4 コースに分かれて学びを深める。

2000 年開設の現代福祉学部は、教育理念として「みんなが健康で幸せを感じられる地域社会の構築（ウェルビーイング）」を掲げ、そのための対人援助や地域づくりに資する人材の養成をするための教育・実習プログラムを用意している。福祉コミュニティ学科、臨床心理学科の 2 学科を置いている。



多摩キャンパス　法政 V ブリッジ・ペデストリアンデッキ

多様化、国際化を積極推進

情報社会と呼ばれる現代においては、多くの情報をほかのさまざまな情報と組み合わせて分析することで、新しい価値を生み出す社会になっている。情報を効果的に扱う手法を学び、考えていくのが情報科学であり、2000 年に発足した情報科学部は、情報科学に必要な数学・物理の基礎から、コンピュータの基礎知識、人工知能などの専門領域に至るまでの科目群を用意している。

2003 年にスタートしたキャリアデザイン学部は、「キャリア」を生涯、経歴、行路など広くとらえ、一人ひとりにとってかけがえのない「人生=キャリア」を主体的にデザイン（設計、再設計）していくとともに、他者のキャリアデザインの支援ができるような専門的な知識やスキルを学ぶことを目的としている。企業や地域社会などにおいても、他者・他社と関わりながら活動するあらゆる場面で活用することができるような能力を身につけていく。

デザイン工学部は、工学的知見を軸足において、自然環境、歴史文化、社会に対する幅広いまなざしを持って取り組む。社会的なニーズに応えられる広い視野を持ち、人とのコミュニケーション能力が高く、時代の風に敏感な造形力あふれるデザイナーを養成する。建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科の３学科で構成されている。

2008 年に創設されたグローバル教養学部（ＧＩＳ）は、新しい時代のリベラルアーツ教育を提供する学部である。人文・社会科学・ビジネスなど約 30 の専門科目すべてを英語で学び、学際的な視座に立った最新の理論と知見を身につける。ほとんどの授業を 20 人程度に抑え、議論やプレゼンテーション、レポートへのフィードバックなど少人数ならではの双方向教育を徹底しており、教員と学生の出身地や長期滞在先は世界約 50 の国・地域に上る。

スポーツ健康学部は、2009 年に設置された学部で、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを究極の狙いとし、「スポーツ」「健康」を科学的に深く掘り下げていく。

多摩キャンパス 18 号館（スポーツ健康学部棟）

キャンパスは、本部のある市ヶ谷キャンパスのほか、経済学部、社会学部、現代福祉学部、スポーツ健康学部の学生が学ぶ多磨キャンパス、情報科学、理工、生命科学の各学部の入る小金井キャンパスに分かれている。

大学では 2030 年の創立 150 周年を見据えて長期ビジョンである「ＨＯＳＥＩ２０３０」を 2016 年度に策定した。その一環として「ダイバーシティ宣言」を発表し、学内の多様化を積極的に推進している。宣言では、校風としてきた「多様性（ダイバーシティ）」を一層推し進め、性別、国籍、年齢などにかかわらず、多様な学生・教職員の活躍の場が広がり、それぞれの能力が飛躍する大学を実現することを目指していく。

国際化への取り組みとしては、「世界に開かれた大学」「市民に開かれた大学」「多様な知に開かれた大学」を基本理念に据え、「持続可能で平和な地球社会の構築に貢献する大学」を目指す「グローバルポリシー」を 2014 年に制定した。これに基づき、海外の大学との間で、学術一般協定、学生交換協定・研究者交換協定などを締結している。学術一般協定、学生交換協定などの海外交流協定を結んでいる大学は、47 か国・地域の 260 大学・機関に上る。

海外からの留学生数は年々増加、2019 年度には 40 か国・地域の 1500 人超に達したが、この 2 年ほどは、新型コロナウィルスの影響が出ている。

学生数は、学部生が 27141 名（うち女性 10778 名）、大学院（専門職大学院を含む）が、3205 名（うち女性 1091 名）。また、大学の教員数は 774 名（兼任講師を除く）である。（いずれも 2022 年 5 月現在）

毎年武道館で行う入学式（2021 年客観日本編集部撮影）

総長は廣瀬克哉氏である。1981 年東京大学法学部卒、同大学院法学政治学研究科修士課程修了、法学博士。1987 年から法政大学法学部助教授、95 教授、2012 年法学部長、17 年副学長を経て、2021 年 4 月に総長に就任した。専門は行政学・公共政策学・地方自治である。

日文：滝川　進

写真：法政大学 HP